

第2学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ねこのこ / おとのはなびら / はんたいことば」 教材名「ねこのこ / おとのはなびら / はんたいことば」

2 単元の目標

語のまとまりや言葉の響きに気を付けて音読できる。詩を読んで感じたことや分かったことを、友達と共有できる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①語のまとまりや言葉の響きに気を付けて音読している。（〔知識及び技能〕(1)ク）	①「読むこと」において、詩を読んだ感じたことや分かったことを、友達と共有している。（C(1)力）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

「ねこのこ」「おとのはなびら」「はんたいことば」を読み、作品ごとの音の響きや言葉の組合せから感じたことを伝え合う。各作品の特徴は実際の本文に戻って確かめる。学習指導要領のC(1)力を中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)クを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点項目に加え、本案では〔知識及び技能〕(1)クを活動に関わる事項として扱う。

(2) 児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

.....

.....

.....

(3) 指導について

教科書の詩を手元で確かめ、気に入った言葉の場所を指で示してから感じたことを話す。詩の本文は配布物に転載せず、教科書に対応したメモを使う。発声が難しい場合は教師の読みを聞き、間や速さの選択で参加できる。おおむね満足できる状況は、詩を読んで感じたことや分かったことを、友達と共有しているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○作品ごとに音読して印象に残る言葉を選ぶ。選んだ作品の言葉と感じたことを結び付ける。	学習状況を見て支援する。
	2 (本時)	○友達と好きな言葉や感想を伝え合う。別の作品にも戻り言葉の響きを比べる。	知①・思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

詩を読んで感じたことや分かったことを、友達と共有できる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「この言葉を声に出すと、どんな様子が思い浮かびますか」 【めあて】「ねこのこ」「おとのはなびら」「はんたいことば」を読み、作品ごとの音の響きや言葉の組合せから感じたことを伝え合う。 〈予想される児童の反応〉 ・同じ音が続くと耳に残る。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「この言葉を声に出すと、どんな様子が思い浮かびますか」 自分で言葉や本文の箇所を確認、理由を添えて考えを書く。ノートを見せて説明し、聞き手は分かったところと、まだ確かめたいところを返す。全体では考えが分かれた箇所を取り上げ、何を根拠にしたかを比べる。 選んだ言葉の響きが伝わるよう、区切りや間を変えて音読し、聞き手が感じた様子を伝える。読む前後の感想を比べ、音読して気付いたことをメモに足す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じ音が続くと耳に残る。 ・区切る所を変えると聞こえ方も変わる。 ・友達は自分と違う様子を想像した。	教科書の詩を手元で確かめ、気に入った言葉の場所を指で示してから感じたことを話す。詩の本文は配布物に転載せず、教科書に対応したメモを使う。発声が難しい場合は教師の読みを聞き、間や速さの選択で参加できる。 想定するつまずき：題名だけで感想を決める、作者の気持ちを一つの正解として当てさせる。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 詩を読んで感じたことや分かったことを、友達と共有している。(発言と学習記録) ◎知① 語のまとまりや言葉の響きに気を付けて音読している。(〔知識及び技能〕(1)ク)(使った言葉・音読や表記の確認)

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・友達は自分と違う様子を想像した。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って紹介や説明の文章を直す。 ◎態①（学習前後の記録と、見直した理由）

（３）板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「この言葉を声に出すと、どんな様子が思い浮かびますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた具体的な言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
 みえ先生ラボ



AI三重